

池松英治

Hideharu Ikematsu



「一斉保育」から「子ども主体の保育」へ

登園したら子どもたちは緑豊かな園庭に出て、あちこちで虫を捕まえたり、お花を摘んだり、巨大黒板に絵を描きだすなど遊びのスイッチが入ります。

園児のお母さまが
「もう園が好きで、日曜日でも園に行く。ゴールデンウィークも園に行く、と言って聞かないんですよ。」
とお話して下さいました。お母さんは大変です。でも私は先生方と乗り越えてきた数々の課題を思い出しながら胸が熱くなります。

以前の一斉保育の時は、子ども達の声より先生の声が大きかったと思います。特に指示的な内容が多かったのではないのでしょうか。練習すれば子どもは上手にできるようになります。でも残念ながら、個性を尊重される時代にもかかわらず、お絵描き一つ例にとっても、みんな同じ絵になってしまっていたのです。

子育てにおいて幼い頃に完成度や達成度を求めてはいけません。早くしたからいいわけではありません。我が子が他の子より早く計算等ができると嬉しいので、どんどんやらせてしまいがちです。早すぎる時期に、やらせ過ぎて、逆に勉強嫌いに育つ可能性があることを知って欲しいです。私は学習塾を経営しているので、そういう子たちを見てきました。意欲に欠ける生徒さんの指導は大変なものです。保護者の心労も尽きません。

五穀豊穡を祈っても苗を植える「時期」を間違えると実りません。子どもの教育にも「時期」があります。

一斉保育のメリットもたくさんありましたが、先生方の指示に従った行動が求められることから、子ども達が受け身の行動に慣れてしまって、自分で考えて行動するために必要な「自主性」を育みにくい点が問題でした。

これまでの時代は「言われたことを上手にできる」と高評価されましたが、これからは、「子どもが主体的に直面する事象から解決すべき課題に気づき、多様な立場の人と協働して、正解ではなく最適解を見出し表現する力を培うこと。」が教育者の役割になりました。幼児教育にも長期的視点が必要になり、ますます私たち教育者自身に学びが求められます。

現在、ひよ子こども園は「子ども主体の保育」で、子ども達は伸び伸びと将来の実りのために広く深く根っこが這う活動をしています。その活動とは「遊び」という名の「経験学習」です。体を動かし五感を働かせて、友達と知恵を出し合って「遊ぶ」＝「学ぶ」子ども達の姿が微笑ましいです。保護者の方に保育方針の変更はお伝えしてきましたが、詳細はご存じなくても子どもたちの伸び伸びした姿を実感してもらっているのかもしれない。また以前より多く

の先生方がゆとりを持って子どもたちを見守る姿も実感してもらっているのかもしれない。おかげさまで、ひよ子こども園の入園説明会には溢れるほどの人に来てもらえるようになりました。大変うれしく思います。ひよ子こども園の現在の姿を支えてくれているのは先生方です。先生方一人一人の献身的なそしてプロフェッショナルな仕事に頭が下がります。



池松英治 (いけまつ ひではる)
令和元年より「社会福祉法人ガジュマル」理事及び「ひよ子こども園かみみね」園長に就任。小学校から大学受験までの学習塾経営。現在も教室およびオンライン講座の指導に携わる。子どもたちの心と頭脳の発達そして教育カリキュラムに見識がある。